

『症状としての学校言説』 小浜逸郎 著（JICC出版局）

『生活科の学習の成立と評価』 上越市立大手町小学校（日本教育新聞社）

『生活科の心理学』 無藤隆 著（初教出版）

『表情する世界Ⅱ 共同主観性の心理学』 増山真緒子 著（新曜社）

『深呼吸の必要』 長田弘 著（晶文社）

無藤 隆

せつかくの夏休み、読書でもという方に、明日から役立つ式のノウハウ本ではなく、保育から少し離れて見直すための本をいくつか挙げておきたい。いずれも、私が読んで、影響されたものである。

『症状としての学校言説』

小浜さんの本はどれも、鋭いが丁寧な論述の中に、ユーモアや皮肉を交えていて、（自分が批判されるのでない限り）読んでいて楽しく、啓発される。いくつかの学校論、教育論も、生活する大人と子どもとの感覚に届く議論を展開して、面白い。今回の本は、小・中・高の教育をめぐるいくつかの最近の有力な論を取りあげ、紹介しつつ、

批判している。例えば、教育技術の法則化運動とその批判。プロ教師論、など、肯定すべきところと否定すべきところを明晰に取り出している。

その論点に必ずしも賛成しない人でも、いろいろと有益な示唆を得ることだろう。少なくとも、記述の展開とともに、自らの考えを進め、自分なりの考えを作っていくのに役立つ。そこまで行かなくても、読んでいる間、思考を巡らす楽しさを覚えるに違いない。

小浜さんの議論では、結局、教育はある押し付けの要素を持つが、社会への適応として、また自分なりの仕事をする上で、ある程度やむを得ない。しかし、学校の比重は現行よりもっと軽くなってよいということになりそうだ。それをそのまま保育、幼稚園教育に持つていくことはできないが、しかし、関連はありそうでもある。どうであるだろうか。

『生活科の学習の成立と評価』

『生活科の心理学』

小浜さんの本と並べられるような本ではないが、現在変わろうとしている小学校教育について、やや理想面ではあるが、知るのに役立つ本として二冊挙げる。ともに、一年後に本格実施される小学校一・二年の生活科について、実践面と理論面とから解説したものである。幼稚園教育と小学校教育の接続を考える上で、このあたりを知ることがは欠かせない。

上越市立大手町小学校は、（私はまだ見ていないが）世間の評判では、最も実践的に進んでいるというところだ。大手町での実践記録が写真と共に詳しく出ているので、生活科がどのようなかを直観的に把握しやすい。もう一冊は私の本で恐縮だが、薄い本で、生活科の理論的エッセンスをまとめてある。

『表情する世界—共同主観性の心理学』

時間のあるときに、難しくてもよいから、人間とその発達の根本から考えてみたいという人に勧めたい。子どもにとっての（そして大人にとっての）世界が他者との関係の中で、情動的性質を帯びたものとして成り立っていることを、何人もの哲学者、心理学者がこれまで指摘してきた。そのことを、ここまで考え抜いて、しかも子どもの発達の実事と切り結びながら、論じた本はなかった。

言葉は、そのような表情を帯びた世界の中から、声の表情を豊かに表現するものとして生まれて来るのである。そのことは、保育を考え直し、例えば、保育内容「言葉」を基本から捉え直すのに、きわめて大事な出発点になる。

ただし、この本の記述は難解である。内容も難しいが、時に、記述が不必要にややこしいと感じられるところもある。「理論心理学」を名乗る以

上は仕様ががないのかも知れないし、新しい地点で初めから考え直すところならざるを得ないのかも知れない。いずれにせよ、読むには覚悟がいる。しかし、時々難しい本を読んだ方が、頭の健康にはいいのではなからうか。

『深呼吸の必要』

硬い本ばかりなので、一冊やや古いが、私の愛好する詩集を挙げておく。難しい本を読んで疲れたら、ひもとくのもよい。楽しいというだけでなく、「あのときかもしれない」という一連の詩では、子どもが大人になる過程を扱っていて、子どもや保育を考える上でのヒントを与えてくれる。しかし、詩集からまで仕事のヒントを得ようというのは、あまりにさもしいので、ゆったりとした時間の中で楽しむこと、いやむしろ読んでいく中でゆったりした時間を経験することで満足すべきなのだろう。

（お茶の水女子大学）